TUMSAT-OACIS Repository - Tokyo University of Marine Science and Technology (東京海洋大学)

東京水産大学TOEICクラスにおけるFaculty Developmentの一研究

著者	三浦 笙子 , 水島 孝司
雑誌名	東京水産大学論集
巻	39
ページ	45-61
発行年	2003-09-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1342/00000146/

The Report of Tokyo University of Fisheries, No. 39, pp. 45–61, September 2003

研究ノート

東京水産大学 TOEIC クラスにおける Faculty Development の一研究

三 浦 笙 子[*1]・水 島 孝 司[*2]

A Study of Faculty Development in Teaching the "TOEIC Class" at Tokyo University of Fisheries

MIURA Shoko[*1] and MIZUSHIMA Koji[*2]

(Received June 20, 2003)

Since April 2000, entering freshmen have taken the TOEIC test at Tokyo University of Fisheries. At the same time, "TOEIC classes"—teaching self-study methods to improve TOEIC scores—have been introduced into the English curriculum. This study is a comparison of two sophomore English classes in 2002 to see the effectiveness of the teaching methods of one such TOEIC class as against the more common methods of a non-TOEIC class. Both classes took the TOEIC test at the end of the sophomore year. By comparing the results with the same students' scores two years previous, it was found that, although both classes improved, the average score of the TOEIC class was 50 points higher than the non-TOEIC class. The major difference lies in the effectiveness of the self-study methods in the TOEIC class, spending hours outside class, listening to English on CD or mass media, and the motivation the score improvement gives to students, whereas the non-TOEIC class emphasized speed-reading in the chosen textbook without particular emphasis on any study other than assignments and tests given from the textbook. The study reveals the importance of expanding English learning time outside the classroom through self-study and motivation.

Key words : English teaching methods, self-study, TOEIC as a motivation tool, TOEIC in college education

Ⅰ. はじめに

2000 年 4 月、東京水産大学では新入生全員に TOEIC テストを導入した。本学英語教室のプロジェクトとして学長裁量経費が配分され、新入生オリエンテーションの午前中 2 時間をこのテストに充てた。TOEIC 導入の最大の目的は英語のコア・クラスである Basic English のクラス分けであったが、入学時から英語を将来のために重要な科目として学生に認識させ、学習の動機づけを強化するという目的もあった。そのため、TOEIC テストに再度挑戦し、英語力を上げたいと思う学生のために英語のカリキュラムを改善し、本学に

*1 Division of International and Interdisciplinary Studies, Tokyo University of Fisheries, 5–7 Konan 4-chome, Minato-ku, Tokyo 108–8477, Japan.（東京水産大学共通講座）
*2 Division of International and Interdisciplinary Studies, Tokyo University of Fisheries, 5–7 Konan 4-chome, Minato-ku, Tokyo 108–8477, Japan.（東京水産大学共通講座・非常勤講師）

「TOEIC クラス」という TOEIC テストのスコアを伸ばすための特別トレーニングを行うクラスが 4 コマ加わった。担当教官は TOEIC 指導に経験のある水島孝司であった。

Ⅱ．研 究 目 標

本研究ノートは、2000 年度以降、本学において TOEIC テストが Basic English のクラス分け以外でどのように活用されているのか、また 2 年生以上の学生が入学後どのくらい英語力を伸ばしているかを明らかにすることを目的とする。研究材料として、2002 年度の Effective English 2 クラスの TOEIC スコアデータを利用し、2 クラスの目標、授業内容、教材、評価方法の違いを明らかにした上で、個人・クラス別の伸びや平均値の差をグラフと表で比較・検討する。

まずは TOEIC テストの概要を、他の英語検定試験と比較しながら紹介する。次に、本学での TOEIC テスト導入以来 4 年間の傾向と現状、全国のデータとの比較を行う。本学の TOEIC クラス導入後の経過を紹介し、TOEIC クラスとはどのような授業なのか、その特徴と教授法を説明し、大学レベルの英語教育における TOEIC 活用の意味を考える。

研究目標として、本学における TOEIC テスト導入のインパクトを最大限に生かす教育方法を編み出し、これからの TOEIC クラス教授法の軌道修正を試み、本学の英語教育に役立てることが挙げられる。

Ⅲ．TOEIC テストの概要

1．TOEIC テストとは何か？

TOEIC とは、Test of English for International Communication の略称で、職場で必要とされる英語力を測定する世界で最も普及しているテストである。試験時間は 2 時間で、マークシート方式による多肢選択テストである。テストは 200 問から成り、Listening と Reading の 2 つのセクションに分かれている。各セクションとも 100 問あり、Listening は 45 分、Reading は 75 分で解答する。テスト結果は 10 点から 990 点までの 5 点きざみのスコアで評価され、スコアは 2 年間有効である。TOEIC は 1979 年 12 月に日本で第 1 回の試験が実施され、現在では世界の約 60 か国で実施されている。2002 年度には日本だけで 132 万 6,000 人が受験した。（TOEIC 公式ホームページ）[1)]

TOEIC は、米国にある世界最大のテスト開発公共機関である Educational Testing Service により開発・制作されている。Educational Testing Service は英語圏の大学留学時に必要な TOEFL（Test of English as a Foreign Language の略称）も制作している組織である。TOEIC の主な特長は次の 5 つである。（TOEIC 公式ホームページ）[1)]

（1）テスト結果は合否ではなく、10 点から 990 点までのスコアで評価される。

（2）評価の基準は常に一定であり、受験者の能力に変化がない限りスコアも一定に保たれる。これにより受験者は正確に現在の英語能力を把握できたり、目標とするスコアを設定することが可能となる。

（3）Listening と Reading という受動的な能力を客観的に測定することにより、Speaking と Writing という能動的な能力までも含めた、英語によるコミュニケーション能力を総合的に評価できるように設計されている。

（4）テストは英文のみで構成されている。また、その国独自の文化的背景や言い方を知らなければ解答できないような問題は排除されている。

（5）受験級のような区分がない。

2．TOEIC、TOEFL、英検の違い

TOEIC、TOEFL、英検（「実用英語技能検定」の通称）を比較したのが表 1 である。TOEFL はアメリカ・

カナダの大学に進学を希望している英語を母語としない外国人学生が受ける英語試験である。一方、英検は日本で最も普及している英語試験で、1968 年 2 月に「文部省認定の技能検定」に定められた。2000 年には、青少年および成人の学習活動にかかわる知識・技能審査事業の認定に関する規則（文部省令）が施行され、同年 8 月に英検はその規定により認可された。(「英検ガイド 2003」p. 18)[2)]

表 1.　TOEIC、TOEFL、英検の比較

	TOEIC	TOEFL	英　検
開発・制作	Educational Testing Service	Educational Testing Service	財団法人日本英語検定協会
初回実施	1979 年 12 月	1964 年	1963 年 8 月
実施国	世界約 60 か国	世界約 180 か国	日本のみ
受験級	なし	なし	１級、準１級、２級、準２級、３級、４級、５級の７つ
テスト結果	10～990 点（５点きざみ)	０～300 点（コンピュータ)、310～667 点（ペーパー)	合格／不合格
測定する英語能力／審査基準	グローバルな職場で必要とされる英語能力	米国・カナダの大学で授業についていける英語能力	１級－広く社会生活に必要な英語を十分に理解し、自分の意思を表現できる。 ２級－日常生活や職場に必要な英語を理解し、特に口頭で表現できる。 その他の級は省略

Ⅳ. TOEIC テスト導入時の状況とその後の傾向

1. TOEIC テスト導入理由

英語教室としては、TOEIC テスト導入を実行する理由がいくつかあった。

(1) Basic English は必修科目ではないが、ほぼ全一年生が履修するため、少人数クラスにしてより教えやすく、学生にもターゲットを絞った授業が受けられるようにクラス分けする必要があった。それまでは英語教室で作成した Comprehensive Test という試験でクラス分けをしていたが、細かい仕分けができないため、より正確なテストが必要だった。

(2) カリキュラム改善のためには本学の学生の英語力を把握し、全国の大学生と比較して、学生に合う教育内容と方法を選ぶ必要があった。

(3) 国際的に通用する英語検定試験である TOEIC は、学生が自分の英語力を世界規模、そして全国規模で英語を外国語として学んでいる他の学習者と比較することができる。数値によって実力の進歩を測る「モノサシ」の役割を果たすので、学習意欲を高める材料となる。

(4) TOEIC テストは最近 3 年次の就職活動開始時に多くの学生が受ける傾向があるので、1 年次に受ければその準備として体験が役立つ。

2. 本学新入生の TOEIC 平均点

2000 年 4 月の TOEIC 導入以来、2003 年 4 月までの本学新入生全員の平均点は表 2 の通りである。

傾向として、毎年新入生の TOEIC 平均点が少しずつだが上昇していることが分かる。しかし、2003 年度になって始めて Reading の平均点が下がっている。その代わり、Listening が 10 点伸びた。これは中学・高校での英語教育が最近、「聞く・話す」を中心としたコミュニケーション能力の育成を重視していることが一つの原因かもしれない。一方、Reading に十分時間がかけられなくなっている可能性も考えられる。

3. 全国平均点との比較

TOEIC には公開テストと団体特別受験制度（IP : Institutional Program）の 2 つの受験方法がある。公開テストは、TOEIC 運営委員会が定めた日時・場所において受験するもので、IP は企業・学校等で任意に日時・場所を設定のうえ、受験するものである。本学の新入生や TOEIC クラスの学生が受けるテストは、TOEIC IP である。

本研究ノートのデータ対象としている 2 つの Effective English クラスの学生が 1 年生だった 2001 年度に、全国の大学生が受けた IP テストの平均点は表 3 の通りである。

本学 2 年生以上は全学年の TOEIC データがないため、1 年生しか全国平均点との比較ができない。2001 年度の本学 1 年生は全国平均 356 点を 7 点（Listening 2 点，Reading 5 点）上回り、363 点となっている。なお、全国の大学・短大・高専内で実施された TOEIC IP の結果を見ると、理・工・農学系の全国平均は 385 点（Listening 213，Reading 172）となっている。（TOEIC 運営委員会「TOEIC テスト 2001 DATA & ANALYSIS」p. 7）[3)]

表 2.　TOEIC 導入後 4 年間の平均点

試験実施年月	受験者数	Total	Listening	Reading
２０００年４月	３０３	３５４	２０４	１５１
２００１年４月	２９９	３６３	２０３	１６０
２００２年４月	２９７	３６８	２０４	１６４
２００３年４月	３０２	３７１	２１４	１５８

表 3.　全国大学生の TOEIC IP 平均点

学年	受験者数	Total	Listening	Reading
１年	38,807	３５６	２０１	１５５
２年	23,088	４１１	２３１	１８０
３年	39,196	４５２	２５１	２０１
４年	11,932	４７９	２６６	２１３

（TOEIC 運営委員会「TOEIC テスト 2001 DATA & ANALYSIS」p.8）[3)]

Ⅴ．本学の英語カリキュラムと TOEIC クラス

1. 本学の英語カリキュラム

本学の英語カリキュラムは、次の 4 科目、計 34 コマが柱となっている。

（1）1 年次　Basic English（12 コマ）
（2）1 年次　Practical English（10 コマ）
（3）2 年次　Effective English（6 コマ）
（4）2 年次　English Seminar（6 コマ）

Basic English 以外はレベル分けをしていない。2000 年度に英語カリキュラムに TOEIC クラスを導入し、

現在は Practical English 3 コマと Effective English 1 コマを水島の TOEIC クラスに充てている。Basic English と TOEIC クラス以外の英語の授業は、speaking, listening, reading, writing, discussion, debate, translation, computer-based English 等、英語の実践的運用能力の育成を目指しており、一昔前に典型的だった「訳読」中心で、いわゆる英文学の古典作品を一行ずつ訳していき、しかも当てられていない学生は眠っていてもいいような授業は少なくとも過去 10 年間この大学には存在していない。

2. TOEIC クラス

TOEIC クラスは、水島が担当する Practical English J（TOEIC Training）と Effective English J（TOEIC Training）の 2 科目、4 コマを指す。これらのクラスでは、TOEIC が英語運用能力を測る試験であることを踏まえ、英語の知識を増やす「勉強」だけに終わらせず、知識として獲得した英語をスキルに転換する「トレーニング」に力を入れている。また、年間 45 時間（90 分×30 回）という授業時間数では、英語への接触時間も、またコミュニケーションの道具として英語を使い込んでいく時間も圧倒的に足りない。従って、授業時間の一部を割いて、自己学習法やそれに適した教材などを紹介し、学生の教室外での自己学習を積極的に支援している。以下に、水大 TOEIC クラスの 3 つの大きな特徴を紹介する。

（1）モチベーションツールとしての TOEIC

すべての TOEIC クラスで、TOEIC をモチベーションツールとして利用している。学生は TOEIC で何点取りたいという目標があるから、それに向かって授業だけでなく、自分一人でも学習するようになる。また、TOEIC スコアの伸びが年間成績の 15〜20 パーセントを占めていることも、良い成績を取りたいので頑張るという英語学習の外発的動機づけにもなっている。TOEIC クラスを履修する学生には、6 月と 2 月の 2 回、TOEIC を受験することが義務付けられている（受験料は自己負担）。6 月受験の目的は、学生が自分の英語力をより正確に把握してから、講座終了時の目標を設定するためである。1 年生は新入生オリエンテーション期間中に Basic English のクラス分けのために TOEIC を受験するが、この結果は試験の問題形式への不慣れから、多くの学生の英語力を正確に反映しているとは思えない。TOEIC には、英語の実力が伸びなくとも単に問題形式に慣れるだけでスコアが上がる Practice Effect（練習効果）があることが報告されている（千田他 2001）[4]。2 年生以上の学生が 6 月に TOEIC を受験するのは、入学時 TOEIC の結果が Practice Effect を考慮すると完全に信用できないからと、入学後 1〜3 年間の英語学習の成果を測るためである。

6 月の試験結果が出たら、すべての TOEIC クラスで、翌年 2 月の TOEIC で目指したいスコアを学生一人一人が設定する。2 月に TOEIC を受験するのは、1 年間（正確には夏休みを含めて約 8 か月）の学習成果を測るためである。

（2）自己学習結果の成績への反映

TOEIC クラスでは、4 月のクラスオリエンテーション時に「英語能力というものは何時間の研修で何点と小刻みに伸びるものではなく、少なくとも何百時間という単位で伸びるもの」（TOEIC 運営委員会「TOEIC 活用実態報告第 8 回」p. 34）[5]、また年間の授業時間数が 45 時間しかないないので、不足分を教室外の自己学習で補ってほしいと伝えている。そして、自己学習の結果を成績評価に組み込むようにしている。やり方は大きく 3 つあり、1 つは学生に英語学習時間を毎月報告させ、学習時間数に応じて成績をつける方法。もう 1 つは、前期・後期または夏休み中の自己学習を振り返らせ、それを自己評価させる方法。3 つ目は、学生全員に 1 か月間毎日やる課題を出して、その結果を自己学習用紙に記入させ、定着させる方法である。2002 年度を例に取ると、1 つ目を金曜日の Practical English 2 クラスで、2 つ目と 3 つ目をすべての TOEIC クラス（Practical English 3 つと Effective English 1 つ）で実施した。以下に、実施内容を簡単に紹介する。

① 学習時間数による評価

2002 年度後期の 10 月 1 日から 1 月 31 日までの 4 か月間、金曜日の Practical English J を履修する全学生に、毎日の英語学習時間（洋画を見るなどの英語接触時間、アルバイトで英語を使うなどの英語使用時間を含む）を記録させた。4 か月間の最低目標時間を 200 時間とし、これをクリアできた者に 10 点を与えた（200

時間以下の場合、20 時間につき 1 点で計算)。年間成績 100 点のうち 10 点が学習時間数で決まることになる。毎日の学習時間の記録には『TOEIC TEST 英語学習ダイアリー』(丸善)を使い、1 か月単位で学生に学習時間報告書を提出させた。なお、この実践記録は水島(2003)[6] を参照されたい。

② 学生による自己学習評価

前期授業の最後(または夏休み終了後)と後期授業の最後に以下の質問に数字で答えさせ、それを成績評価の一部とした。最高が 5 点、最低が 1 点で、年に 2 回実施するので、最高で 10 点となる。つまり、年間成績 100 点のうち 10 点がこの自己評価で決まる。

Q : 私は今学期の間、英語力を高めるため、自主的に計画や目標を立てて学んだ。

(該当する数字を丸で囲んで下さい)

5 : まったくその通り

4 : ほぼその通り

3 : なんとも言えない

2 : どちらかというと違う

1 : まったく違う

③ 教員による自己学習評価

毎日英語に触れる習慣を身につけてもらう意味で、2002 年度前期の 6 月 1 日から 30 日までの 1 か月間、全員の学生に教科書(『TOEIC テストへはじめて挑戦!まずは 350 点』)を使った自己学習課題を出した。その結果は教員が用意した「自己学習記録用紙」に記入し、7 月最初の授業で提出させた。課題の内容は、英語構文のリスニング・リピーティング・音読筆写、および教科書以外で触れた英語から、「使ってみたい表現」「感動した表現」を 1 日 1 つ書くというものである。毎日 30 分程度を要する課題であった。

(3) 自己学習法・学習材料の紹介

授業の一部を使って自己学習法を紹介、実際に教材やプリントを使いながらやってみる。英語の運用能力を高めるための自己学習法が分からないと、またそれを実践するための学習材料(learning materials)を持っていないと、いくら教室外で自己学習するように言っても学生は困ってしまう。また、常識的に考えて、週 1 回の授業でできることには自ずと限界があり、また年間授業時間数 45 時間(90 分×30 回)では英語を使い込み、マスターするには圧倒的に時間が足りない。従って、時間はかかるが、授業中に自己学習法をできるだけ分かりやすく紹介・指導し、それが正しく身についているかの確認を個人による口頭発表や小テストなどを通じて行っている。

Ⅵ. 2002 年度 TOEIC 2 クラスの比較研究

1. 研究目的

本学の 2 年生以上の学生が、入学後どのくらい英語力を伸ばしているかを明らかにするために、TOEIC スコアの伸びで、教育効果(学習効果)を測る。

2. 研究方法

2001 年度に本学に入学した学生の、入学時と 2 年後の TOEIC スコアを比較する。

3. 研究対象

2002 年度に Effective English C(Speaking and Reading, 三浦担当)と Effective English J(TOEIC Training, 水島担当)を履修した学生のうち、2001 年度に入学した 2 年生で、入学時と 2 年後に TOEIC を受験した者(三浦クラス 24 名、水島クラス 27 名)。

4. 2 クラスの特徴

（1）授業の目的とねらい

2002 年度のシラバスに掲載した Effective English C（以下、C クラス）と Effective English J（以下、J クラス）の授業の目的とねらいは、以下の通りである。

① C クラス

TOEIC スコアを伸ばす目標を立て、2 年次レベルの素早い読解・リスニング・会話力を身に付ける。スピード・リーディングの英文を読み、reading speed を測り、記録する。内容の正確な意味を確認し、接頭語、接尾語、語源などで語彙を増やす。パラグラフ分析法を学び、文の展開の予測などで、長文の読解力を伸ばす。プリント等の別教材で実践的な家庭・大学・旅行等のシチュエーションに適応する語彙を使って、より自由な speaking を目指す。頭の中の英語を早く回転させるためにスピード・リスニングの訓練も行う。また、短い writing により、覚えた表現を実際に使って確認する。

② J クラス

TOEIC スコアを伸ばす目標を立て、2 年次レベルのリスニング能力とスピーキング能力を高め、スピードを意識したリーディング力を養成する。授業では音読、スラッシュ・リーディングといった基本トレーニングに力を入れるほか、シャドーイング、ディクテーション、英字新聞記事の読解といった実戦トレーニングでリスニング・スピーキング力と文法・語彙力の向上を目指す。また、TOEIC の利用法・学習法を正しく理解し、それを教室外での自己学習でも実践して、TOEIC スコアのアップを目指す。

（2）授業内容

C クラスは、授業中に速読、音読、シャドーイング、解読、読解問題の答え合わせ、ディクテーション、会話ゲーム（即答、discussion）、英訳が主体で、宿題はテキストから出すのみで、自己学習は勧めたが特にチェックはしなかった。主な目的がスピード・リーディングであったので、テキストの文章の速読を持続させ、担当教官が作成した Speed Reading Chart（速読表）に記録をつけさせた。授業の約半分は英語で行った。ほぼ毎週テキストの中からディクテーションテストを出し、お互いのテストを採点し、リスニング力を試した。

J クラスは、授業中に音読、シャドーイング、自己学習の確認活動（ペアで毎週 20 の英語構文の即答練習、長文の音読）、ニュースや日常会話のディクテーション、新聞・雑誌記事の読解を行った。また、（ヴォーカル・アイ）シャドーイング、音読筆写などの自己学習法の指導や、自己学習に適した教材・素材の紹介を年間を通じて行った。

（3）教材

C クラスと J クラスで使用した教材は表 4 の通りである。

C クラスは速読に重点を置いていたので、リーディング・スピードを上げ、読解力を試す問題と英訳が中心の教材を選んだ。教材に音声は付いていなかった。一方、J クラスは、音声を重視した「自己学習」に重点を置いていたため、2 冊とも CD 付きの教材を選んだ。前者は、自己学習法と学習材料（英語構文・長文）が入っており、授業で使う主たる教材であった。後者は TOEIC の問題形式の解説とウォーミングアップ問題、ならびに本番の試験同様 200 問の模擬問題が入った教材であった。

表 4.　C クラスと J クラスで使用した教材

クラス	教材名	出版社
C	『Intermediate Faster Reading』	成美堂
J	『TOEIC テストへはじめて挑戦！まずは 350 点』（CD 付き）	明日香出版社
	『はじめての TOEIC』（CD 付き）	ジャパンタイムズ社

（4）評価方法

C クラスの点数配分（100 点満点）は、次の通りである。

5%　1 年生 4 月〜2 年生 2 月 TOEIC の伸び率（50 点の伸びごとに 1 点の得点）
30%　ディクテーションテスト・語彙テスト・音読力・授業内発表・出席
30%　前期期末テスト
35%　後期期末テスト

J クラスの点数配分（100 点満点）は、次の通りである。

15%　筆記テスト（語彙・ディクテーション）
15%　授業内発表（音読力・英語構文即答）
5%　教員による自己学習評価（6 月分）
10%　学生による自己学習評価（夏休み・後期）
15%　授業参加・出席
20%　前期期末テスト
20%　2 月の TOEIC テスト（後期期末テストの代わり）

5. 結果

（1）入学時と 2 年後の TOEIC スコア平均点

表 5 は、入学時（2001 年 4 月）と 2 年後（2003 年 2 月）の TOEIC スコア（Total, Listening, Reading）の平均点を、クラス別に示したものである。1 年次 4 月のクラス平均点は、J クラスが 371 点で、C クラスの 389 点より 18 点低かった。およそ 2 年後の 2 年次 2 月にはクラス平均点が逆転し、J クラスが C クラスよりも 32 点高くなっている。

表 6 は、表 5 のスコアの差をもとに、クラス別の 2 年間の伸びを Total, Listening, Reading スコア別に示したものである。2 クラスの伸びの平均値には 50 点の差があった。J クラスの Total スコアの伸びは 76 点と大きく、セクション別では Listening スコアの伸びが 45 点と顕著である。

表 5.　入学時と 2 年後の TOEIC スコア

	2001 年 4 月			2003 年 2 月		
クラス	Total	Listening	Reading	Total	Listening	Reading
C	389	218	171	415	228	189
J	371	202	168	447	247	200

表 6.　2 年間の TOEIC スコアの伸び

クラス	Total	Listening	Reading
C	26	10	18
J	76	45	31

表 7 と表 8 は、調査対象となった 2 クラスの学生個人別データである。Total スコアの伸びの大きい順で学生に番号を付け、入学時と 2 年後、2 年間の伸びを示している。

表 7.　C クラス　2 年間の伸び：TOTAL スコア　伸び順

	2001年4月			2003年2月			伸び		
学生	LISTENING	READING	TOTAL	LISTENING	READING	TOTAL	LISTENING	READING	TOTAL
1	250	140	390	230	335	565	−20	195	175
2	225	190	415	335	255	590	110	65	175
3	225	100	325	290	180	470	65	80	145
4	300	155	455	310	240	550	10	85	95
5	230	140	370	260	195	455	30	55	85
6	255	180	435	290	225	515	35	45	80
7	185	135	320	205	180	385	20	45	65
8	180	215	395	245	205	450	65	−10	55
9	195	175	370	260	145	405	65	−30	35
10	205	160	365	190	195	385	−15	35	20
11	235	185	420	205	230	435	−30	45	15
12	200	180	380	225	155	380	25	−25	0
13	210	205	415	265	145	410	55	−60	−5
14	225	175	400	215	180	395	−10	5	−5
15	165	180	345	205	130	335	40	−50	−10
16	210	230	440	235	195	430	25	−35	−10
17	210	160	370	160	195	355	−50	35	−15
18	220	160	380	215	150	365	−5	−10	−15
19	265	215	480	230	235	465	−35	20	−15
20	180	180	360	175	155	330	−5	−25	−30
21	200	175	375	185	210	345	−15	35	−30
22	250	125	375	205	120	325	−45	−5	−50
23	205	160	365	185	125	310	−20	−35	−55
24	205	195	400	160	160	320	−45	−35	−80
平均値	218	171	389	228	189	415	10	18	26

表 8.　J クラス　2 年間の伸び：TOTAL スコア　伸び順

	2001年4月			2003年2月			伸び		
学生	LISTENING	READING	TOTAL	LISTENING	READING	TOTAL	LISTENING	READING	TOTAL
1	180	120	300	330	235	565	150	115	265
2	135	195	330	280	260	540	145	65	210
3	195	130	325	290	210	500	95	80	175
4	250	185	435	320	285	605	70	100	170
5	195	220	415	325	250	575	130	30	160
6	250	185	435	335	255	590	85	70	155
7	220	120	340	315	165	480	95	45	140
8	205	90	295	295	135	430	90	45	135
9	165	140	305	245	175	420	80	35	115
10	205	160	365	245	225	470	40	65	105
11	260	275	535	345	270	615	85	−5	80
12	220	200	420	265	235	500	45	35	80
13	240	110	350	215	205	420	−25	95	70
14	125	100	225	160	135	295	35	35	70
15	120	85	205	170	95	265	50	10	60
16	195	150	345	245	150	395	50	0	50
17	195	230	425	205	260	465	10	30	40
18	220	125	345	205	180	385	−15	55	40
19	235	180	415	285	170	455	50	−10	40
20	155	135	290	190	125	315	35	−10	25
21	235	215	450	270	195	465	35	−20	15
22	220	155	375	170	210	380	−50	55	5
23	210	175	385	215	170	385	5	−5	0
24	175	155	330	145	150	295	−30	−5	−35
25	170	180	350	205	110	315	35	−70	−35
26	170	250	420	140	240	380	−30	−10	−40
27	320	280	600	260	295	555	−60	15	−45
平均値	202	168	371	247	200	447	45	31	76

（2）スコア別の伸び

図 1 と図 2 を比べると、Total スコアが伸びた学生が C クラス 11 名に対し、J クラスは 22 名である。これは 1 : 2 の比率である。また、100 点以上スコアが伸びた学生が C クラス 3 名に対し、J クラスは 10 名いる。

スコアの伸びの最高点と最低点の上下幅を図 1、2 で見てみると、J クラスの伸びの山が高さと幅の両面で勝っているのが一目瞭然である。表 9 から分かるように、最高点を比較すると J クラスが 90 点高く、最低点は C クラスが 35 点低い。

図 3 と図 4 を比べると、Listening スコアが伸びた学生が C クラス 12 名に対し、J クラスは 21 名である。これはおよそ 1 : 2 の比率である。また、50 点以上スコアが伸びた学生が C クラス 5 名に対し、J クラスは 13 名いる。J クラスは、クラスのほぼ半分の学生が 50 点以上伸びたことになる。

スコアの伸びの最高点と最低点の上下幅を図 3、4 で見てみると、J クラスの伸びの山が高さと幅の両面で勝っているのが一目瞭然である。表 10 から分かるように、最高点を比較すると J クラスが 40 点高く、最低点は J クラスが 10 点低い。

図 5 と図 6 を比べると、Reading スコアが伸びた学生が C クラス 13 名に対し、J クラスは 18 名である。これはおよそ 2 : 3 の比率である。また、50 点以上スコアが伸びた学生が C クラス 5 名に対し、J クラスは 9 名いる。

スコアの伸びの最高点と最低点の上下幅を図 5、6 で見てみると、伸びの山の高さでは C クラスが勝っているが（1 人ではあるが）、伸びの山の幅では J クラスが勝っているのが分かる。表 11 から分かるように、最高点を比較すると C クラスが 80 点高く、最低点は J クラスが 10 点低い。

Ⅶ. 考　　察

1. Total スコアの伸び

2 クラスの伸びの平均値には 50 点の差があった。これが個人差であれば大した意味は持たないが、24〜27 名のクラス間に平均で 50 点の差が出たことは注目に値する。ただし、C クラス 26 点、J クラス 76 点の伸びは入学後 2 年間の学習成果であって、本研究の調査対象となった学生が Effective English を履修した 2 年次 1 年間の学習成果ではない。この点を断った上で、考察を行う。

J クラスの Total スコアが平均で 76 点伸びた大きな要因としては、次の 3 つが考えられる。

（1）授業で紹介した学習法やそれに適した教材（クラスの指定教材を含む）を使って、教室外で年間授業時間数の何倍もの自己学習をした学生が多かった。

（2）TOEIC スコアの向上を目指すというクラスの明確な目標と、自分で行った目標設定が英語学習の動機づけになった。

（3）TOEIC が後期定期試験の代わりだったので、良い成績を取るために試験前も試験中も集中して取り組んだ学生が多かった。

J クラスの後期最終授業で実施したアンケートによれば、後期期間中に教室外で 1 日平均 1 時間以上英語に触れていた学生が 9 名、1 日平均 30 分以上英語に触れていた学生が 8 名いた。つまり 27 名中 17 名が、毎日 30 分以上英語に触れていたことになる。1 日平均 1 時間触れていた学生は、後期の 4 か月半（約 135 日）だけで、およそ 135 時間英語に触れていたことになり、これだけで Effective English の年間授業時間数（45 時間）の 3 倍になる。この事実から、年間で何百時間単位の自己学習をしていた学生が過半数であったことが推察され、これが J クラスの好結果につながったと考えられる。C クラスの Total スコアが J クラスほど伸びなかった 1 つの要因としては、教育は大学の教室内だけのもの、教材さえマスターすればいいもの、という従来の大学英語教育の考えを捨て切れなかったことがあるかもしれない。

次に、Total スコアが伸びた学生の割合について考察する。C クラスで Total スコアを伸ばしたのは、24 名中 11 名と 5 割以下だったのに対し、J クラスでは 27 名中 22 名と、8 割以上の学生がスコアを伸ばしている。

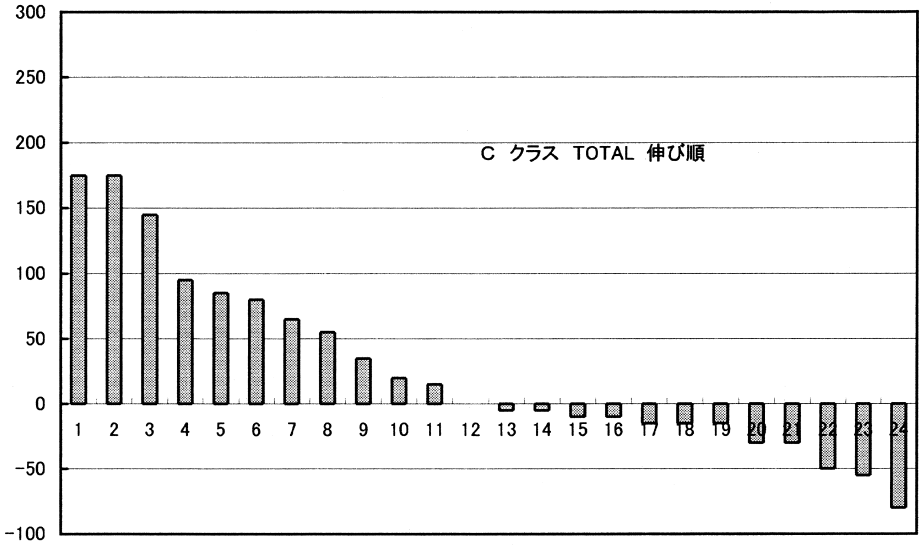

図 1.　C クラス Total スコア　伸び順

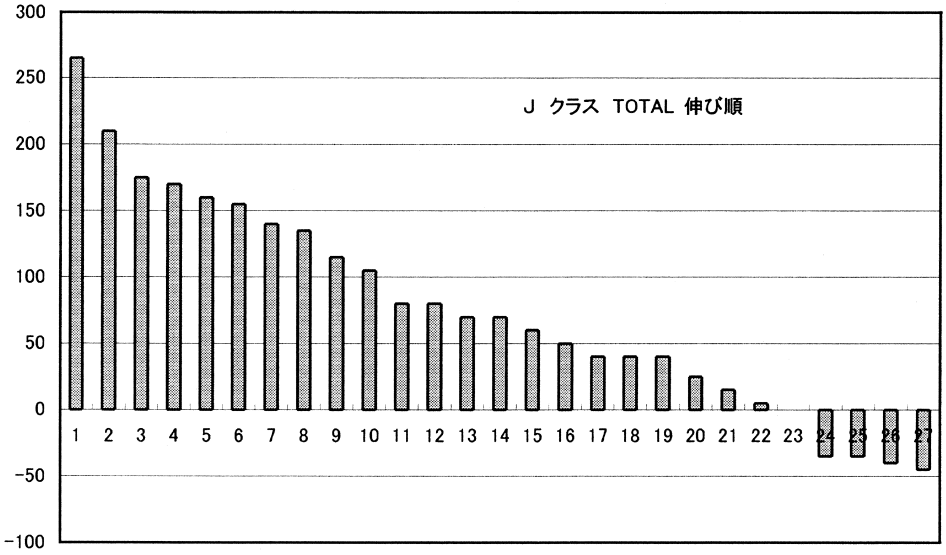

図 2.　J クラス Total スコア　伸び順

表 9.　最高点と最低点の上下幅

クラス	上下幅	最高点	最低点
C	２５５	＋１７５	－８０
J	３１０	＋２６５	－４５

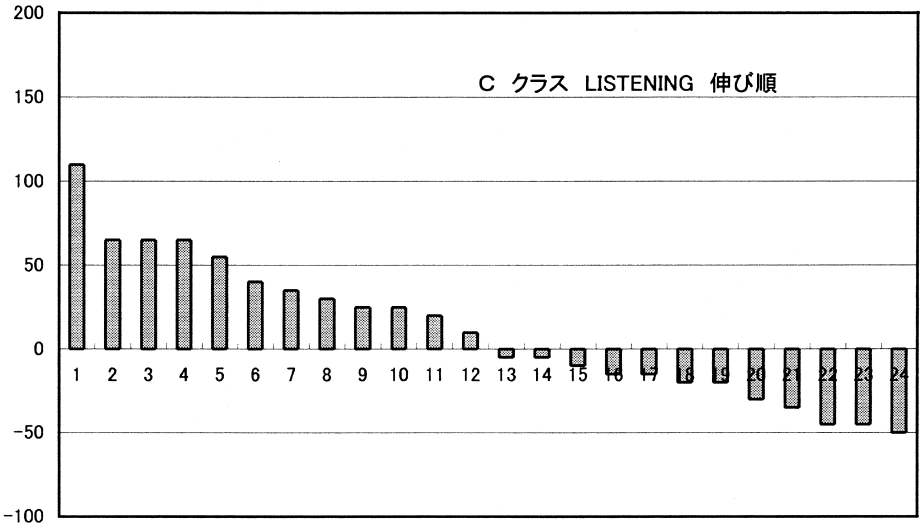

図 3.　C クラス Listening スコア　伸び順

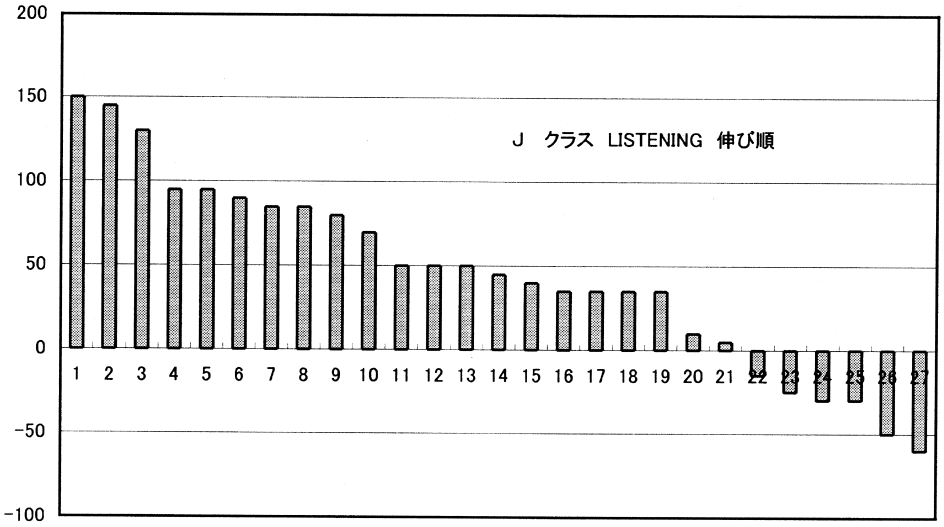

図 4.　J クラス Listening スコア　伸び順

表 10.　最高点と最低点の上下幅

クラス	上下幅	最高点	最低点
C	１６０	＋１１０	－５０
J	２１０	＋１５０	－６０

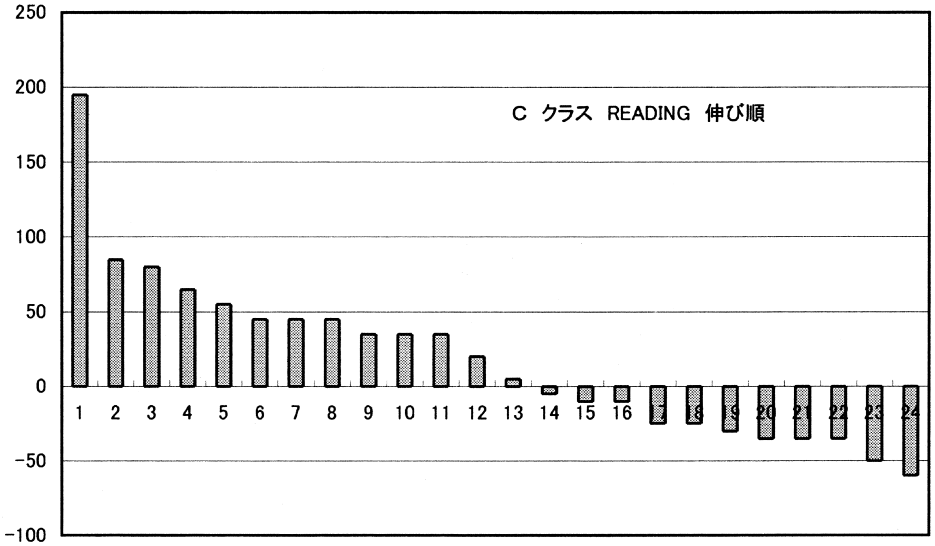

図 5.　C クラス Reading スコア　伸び順

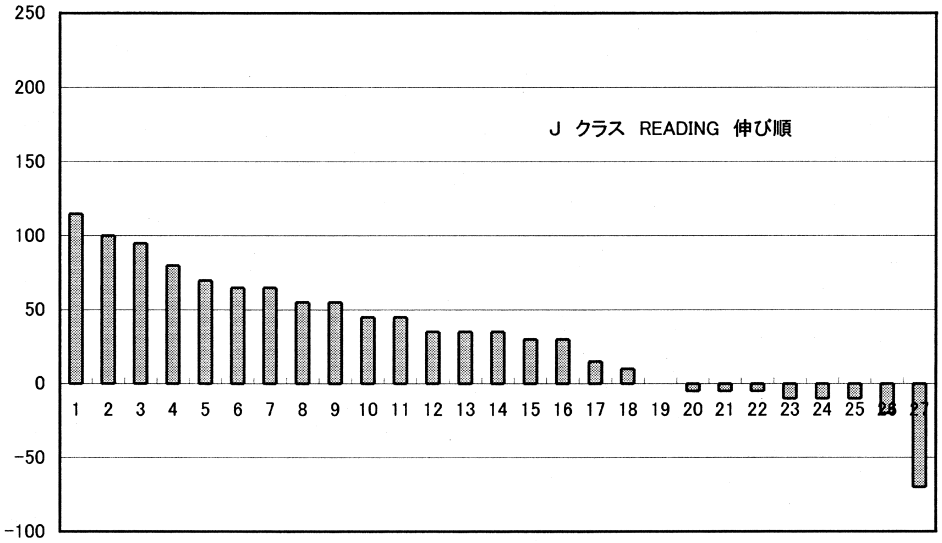

図 6.　J クラス Reading スコア　伸び順

表 11.　最高点と最低点の上下幅

クラス	上下幅	最高点	最低点
C	２５５	＋１９５	－６０
J	１８５	＋１１５	－７０

C クラスの半分以上の学生が Total スコアを落とした大きな要因としては、TOEIC スコアをアップさせるという明確な目標なしに学習していたこと、従って 2 年次 2 月の試験でも TOEIC の問題形式や英語のスピードに十分慣れないまま受験した学生が少なくなかったことが考えられる。逆に、J クラスでは試験の問題形式やスピードへの不慣れでスコアを落としたと思われる学生は少なく、その分授業での学習と授業外の自己学習の成果がスコアに表れた学生が多かったと言ってよいだろう。また、J クラスの学生には TOEIC スコアのアップを目指すという明確な目標があり、また TOEIC が後期試験の代わりであったことも、8 割以上の学生が Total スコアを伸ばした要因であると考えられる。

2. Listening スコアの伸び

J クラスは平均で 45 点、C クラスは平均で 10 点伸びて、その差は 35 点であった。また、リスニングが伸びた学生は C クラス 12 名に対し、J クラスは 21 名であった。このような差をもたらした最大の要因は、テキスト付属の CD を活用した自己学習ではないかと考えられる。J クラスでは、テキストの CD を何度も聞いて、音読やシャドーイングをし、英語の一部を「分かる」から「使える」レベルに変えて授業に出席することが求められていたので、年間を通じて何百時間の単位で英語を聞き、学習していた学生が多かったと推察される。前出の「アンケート」では、英語力の向上のためにテキストの CD を目覚まし代わりに使ったり、通学時に聞いたり、夜寝る前に聞いたりした学生が 10 名おり、学生が CD をよく利用していたことが明らかになった。また、「アンケート」から、Listening スコアの伸びが J クラスで 1 位（150 点）、2 位（145 点）だった学生は、毎日 1、2 時間英語に触れ、テキストを毎日 1、2 ユニットこなし、さらに長文のシャドーイングに力を入れていたことも分かっている。一方、C クラスのテキストには CD が付いていなかったので、授業以外で定期的に英語の音に触れていた学生は J クラスに比べて少なかったと思われる。日頃の学習で、英語の音とスピードに十分慣れていなかった学生が少なくなかったことが、C クラスの Listening スコアの伸びが 10 点に留まった大きな原因ではないかと考えられる。「アンケート」からはさらに、J クラスには洋画、海外ドラマ、英語ニュース（AFN を含む）、洋楽（カラオケを含む）などを使って、生の英語に触れていた学生が 19 名いたことも分かっており、これも大なり小なり Listening 能力の向上に貢献したと考えられる。C クラスでは同様のアンケートを実施していないため、どれくらいの学生が生の英語に触れていたかは分からない。

3. Reading スコアの伸び

J クラスは平均で 31 点、C クラスは平均で 18 点伸びて、その差は 13 点であった。リーディングよりもリスニングを重視した J クラスで、リーディングを重視した C クラスを上回る結果が出たのはなぜであろうか。考えられる最大の要因は、J クラスではスピードを意識したリーディング力の養成のために音声を使ったことである。音声とは、テキスト付属の CD である。音声を使うと後戻りして意味を考えることができないので、聞こえる順に理解していく訓練は、そのまま英語の語順で理解する読み方に直結すると考えられる。TOEIC のリーディング・セクションでは 1 分間 150〜200 語のリーディングスピードが要求される。J クラスの学生が使用した CD に入っている英文は、1 分間 150〜180 語程度のスピードで読まれており、それが英語の語順で思考できるリーディング力の養成に役立ったのかもしれない。速読に力を入れた C クラスでは、Total スコアの伸びが大きかった上位 7 名のうち、6 名がリスニングよりもリーディングを大きく伸ばしている。特に、最も大きな伸びを示した学生は、リーディングを 195 点も伸ばしている。これは C クラスが速読を重視し、Rapid Reading Chart を学生に毎週つけさせていた効果の表れと言えるかもしれない。

Ⅷ. 結　　論

本研究ノートは、2000 年度以降、本学において TOEIC テストが Basic English のクラス分け以外でどのよ

うに活用されているのか、また 2 年生以上の学生が入学後どのくらい英語力を伸ばしているかを明らかにすることが目的であった。Effective English 2 クラスの比較研究を通して、TOEIC は Basic English のクラス分け以外に、学生一人一人に合った英語学習目標の設定、目標の明確化による学習モチベーションの向上、さらに教室外での自己学習につなげる上でも役に立っていることが分かった。

表 12 は、2002 年度に Effective English C（Speaking and Reading, C クラス）と Effective English J（TOEIC Training, J クラス）を履修した学生のうち、本研究の対象となった 2 年生の 2 年次 2 月の TOEIC IP 平均点と、全国の大学 2 年生の TOEIC IP 平均点を比べたものである。

C クラスはほぼ全国平均レベルにあり、Reading スコアが若干高い。J クラスは全国平均よりも 36 点高く、大学 3 年生の全国平均 452 点（L : 251, R : 201）に迫っている。入学後 2 年間の伸びを見ると、従来型の大学英語授業に近いクラスを履修した学生は 2 年間で 26 点伸びているのに対し、自己学習を積極的に支援した J クラスを履修した学生は 76 点伸びていることが明らかになった。考察の冒頭でも述べた通り、本研究の対象となった 2 クラスの TOEIC スコアの伸びは、2 年次 1 年間の学習成果だとは言えないが、英語を教える観点から次のことが言えるだろう。

・自己学習習慣の定着が、英語力の伸びに大きな影響を与える。
・自己学習のやり方を教え、またその成果を実際に英語を使って確認するためにも、授業は重要な役割を果たす。
・TOEIC は自分なりの目標設定ができるので、学生の英語学習の動機づけになる。

TOEIC で高得点を獲得する、あるいはスコアを大きく伸ばすためには、授業だけでなく、学生が自らの意思と責任で学ぶことが不可欠である。羽鳥他（1980）[7] が指摘するように、「本当の力は自分で学習する気になって学習したときにつくこと、学校ではごく僅かの限られたことしか教えられないこと、本当の学習は生涯続くこと、などを考えると、これからの英語指導では『教材を通じて学習法をさとらせる』ということにもっと重点がおかれるべきである」と考える。多くの大学生は入学試験合格後に、英語学習の目的・動機づけを失ってしまうので、TOEIC スコアによる目標設定で英語学習への動機づけの維持・強化を図りたい。これがモチベーションツールとしての TOEIC の役割である。自己学習につなげ、学生の自己学習時間を増やさせるための TOEIC 利用法の研究や、自立的学習者の育成を 1 つの大きな柱とした授業実践を今後も続けていきたい。

本学の英語カリキュラムには、全体で 34 コマの語学としての英語の授業がある。そのうち、TOEIC クラスは毎年 4 コマしか置かれていない。それは、他の授業もすべて同じように利点があり、学生にとって実力のつく学習ができるからである。国際感覚を身につけたり、英語を基本から学び直したり、自然科学英語を読みくだいたり、英語のニューズレターを発行して英語を書く力に自信をつけたり、いずれもためになる授業であり、学生に幅広い選択を与えるねらいがある。しかし、従来の教室内と教科書から出る宿題だけの学習や、通常 1 冊だけ選ばれた教科書に頼る授業計画に対し、J クラスの TOEIC テストを利用した自己学習を奨励・支援する教授法は、授業時間数の不足という外国語学習においては致命的とも言える問題を学生自らに克服させ、日常生活レベルで使える英語を身につける具体的な対策を提言している。

本研究ノートで理想としている英語教育は、自転車の両輪と似ている。前輪は舵をとる教室、後輪はそれ

表 12.　TOEIC IP 平均点

	受験者数	Total	Listening	Reading
Ｃクラス２年生平均	24	４１５	２２８	１８９
Ｊクラス２年生平均	27	４４７	２４７	２００
大学２年生全国平均*	23,088	４１１	２３１	１８０

（*TOEIC 運営委員会「TOEIC テスト 2001 DATA & ANALYSIS」p.8）[3]

にパワーを与える課外学習であり、英語学習の従来の弱点であった時間不足を補うことが学生の英語力を伸ばすことにつながると確信している。学生が英語を「理解する」だけでなく、「使える」ようになることが肝心であることを認識させる授業こそ、英語を「使いこなす力」を与える。TOEIC クラスのみならず、本学の他の英語クラスでも課外学習を様々な形で指導している。語学をマスターするためには、その言語にできるだけ毎日かつ長時間接し、頭の中に目標言語が流れている状態が望ましい。学生に自分の英語力が伸びる楽しみを与えて、自己学習を促進する授業を本学英語教室では継続していきたいと考えている。

文　　献

1） TOEIC 公式ホームページ「TOEIC テストとは」2003 年 6 月 20 日検索　http://www.toeic.or.jp/toeic/about/index.html
2） 財団法人日本英語検定協会「英検ガイド 2003」財団法人日本英語検定協会（2003）18
3） 財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会「TOEIC テスト 2001 DATA & ANALYSIS」財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会（2002）
4） 千田潤一・鹿野晴夫「TOEIC テスト 600 点突破までの正しい学習法」SS コミュニケーションズ（2001）11
5） 財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会「TOEIC 活用実態報告」第 8 回　財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会（1996）34
6） 水島孝司　自己学習を支援する大学英語授業「文教大学文学部共同研究費による英語学習の動機づけに関する研究」第 2 次報告書　文教大学文学部英米文学部（2003）53-68
7） 羽鳥博愛・松畑熙一「学習者中心の英語教育」大修館書店（1980）23

東京水産大学 TOEIC クラスにおける Faculty Development の一研究

三浦笙子[*1]・水島孝司[*2]

([*1] 東京水産大学共通講座
[*2] 東京水産大学共通講座・非常勤講師)

2000 年 4 月以降、東京水産大学では新入生全員に TOEIC を受験させている。TOEIC の導入と同時に、TOEIC スコアを向上させるための自己学習法を教える「TOEIC クラス」が本学の英語カリキュラムに加わった。本研究は、TOEIC クラスの教授法とその効果を明らかにするために、より一般的な教授法を採用する TOEIC 以外のクラスと TOEIC クラスを比較したものである。2002 年度に開講された 2 年生向けの 2 つの英語クラスを研究対象とした。どちらのクラスの学生も、2 年次の終わりに TOEIC を受験した。そのスコアを彼らが入学時に受けた TOEIC スコアと比較したところ、いずれのクラスでも伸びが確認されたが、TOEIC クラスが 76 点と、もう 1 つのクラスの 26 点よりも平均で 50 点多く伸びていることがわかった。この違いをもたらした要因は、TOEIC クラスで教えられている自己学習法であり、教室外でテキストその他の英語 CD を聞いたり、テレビ・ラジオ・DVD などのメディアを利用したりして、学生が多くの時間を英語学習に費やしたことだと推察される。また、TOEIC クラスでは試験のスコアを使って目標設定をしたが、これが学生の英語学習の動機づけを強め、それが自主的に英語を学ぶ時間を増やしたと考えられる。速読に重点を置いた TOEIC 以外のクラスでは、1 冊のテキスト（CD なし）から出される宿題やテスト以外は特別の課題を出さなかったので、学生が教室外で日常的に英語を学習したとは考えにくい。本研究の結果、自己学習と動機づけにより、教室外での英語学習時間を増やすことの重要性が明らかになった。

キーワード：英語教授法、自己学習、モチベーションツールとしての TOEIC、大学教育における TOEIC